
Ampere Blood

真中すぺあ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

A m p e r e B l o o d

【Nコード】

N 8 8 0 1 Y

【作者名】

真中すぺあ

【あらすじ】

新世代VRMMO『Genesis World』には他のVRMMOとは一線を画す特徴があった。それはAIによって操作される擬似プレイヤーキャラクターの存在だ。今回のオープンβテストは『彼ら』の初めての運転となるはずだったのだが……。 (VRデスゲームものの予定です)

園に一陣の風が吹く。

鈍い音がした。石槍と狂犬の爪が火花を散らす。

獣と相対する男は名をクライといった。彼にとって名は個を識別するためのものに過ぎない。

腰を落とし、敵の一挙手一投足に対応すべく身構える。日本人としては平均よりわずかに高く設定された身長であるが、眼前の脅威を滅ぼすには十分だ。

しかし、足りない、と彼は呟く。

細く鋭い目はより細く。短く逆だった黒髪は視界を妨げない。二度の後方跳躍で距離を取ると再び槍を構えた。両手の間は腰ふたつ分。穂先は唸る灰色の大型犬。

涎を垂らしながら血走った目を見れば『魔物』と呼ぶのも頷ける。その顎は彼の肉体を恐るべき速さで物言わぬ肉塊に変えることができる。

それに対して男の装備も貧弱極まりない。黒い外套を纏ってはいるもののその他の服は小奇麗な布きれに等しい。

手にした石槍などは男の全長より長いが縄文時代の遺産だ。いくら痩せているとはいえ、目の前の犬を貫くのは至難の業だろう。ゲームの初期装備でもなければ使うことなどまづない。

彼の使うそれが果たしてそうなのかは定かではないが一応槍は突き刺すための武器である。利点は攻撃可能範囲の広さ。敵の攻撃範

囲外から無傷で貫くがための広さだ。故に黒い外套の男も犬から相
当の距離を取っている。

視界には犬の頭上に右半分が黒で逆側が緑色のバーが見えていた。
あと三回の攻撃で倒れるであろうことを予見する。

一足飛びに駆け出す。犬の額に目掛け、槍を突き出した。直線的
な軌道を描くが、速さがそれを補ってあまりある。右に避けようと
した獣の腹を先端の石が捉えた。

低い唸り声をあげて仰け反る。刺さることはなかったが、多少の
血が滲んでいる。地面に流れ落ちた赤は滲んで、吸い込まれるよう
に消えていた。傷ついた部位も完治したように描写されている。し
かし、HPの黒い線は間違いなく減少を示していた。

追撃はしない。突出すれば泥試合になるのは明白だ。無理に距離
を詰めるのは敏捷な体と鋭い爪牙を持つ獣に利がある。急ぐ理由も
ないならば、無理をする必要はなかった。それに先程の一撃が急所
に当たったために次の攻撃次第では倒すことが可能だった。

上方修正された結果に新たな攻撃計画を練り直す。その計算の始
終は瞬きよりも短い。

クライは次も急所を狙う。クリティカルならダメージは150%。

この『世界』では弱点の位置は敵によって固定されている。確実
に急所を狙えるプレイヤースキルさえあればどんなにキャラクター
の技量の値が低くともクリティカル判定となる。

もちろんゲーム上の技量値が高ければ高いほど有利なのは間違い
無い。有効なクリティカルの範囲が広がるからだ。

獣は体勢を立て直すも動こうとはしない。それはクライも同じ。

後の先。

つまり、カウンターが目的だ。もともと槍は数にものをいわせてこそ真価を発揮する。古代においてマケドニアのとったフランクスと呼ばれる集団戦法のようにして密集する具合に。

対人戦の一对一ならば穂先近くから断ち切られてしまうため、あまり好まれない。このゲームにおいてはその心配はないが、どちらにせよどこからくるか予想がつき易いために単調になる。それも設定された特殊な技を使わなければ、の話だが。

痺れを切らした獣が走る。彼は動かない。あと一步と手の動きで仕留められる範囲に入ってもまだ堪える。しかし、そこから先は人外の動きだった。

獣の牙の煌きが見えた瞬間、彼の体は物理法則に反して後方に飛んだ。同時に槍を片手に持ち替え、体を捻る。獣よりも槍の穂先のスピードが上回った。本来『バックステップ』は相手の攻撃を回避するためのものだ。彼はそれを攻撃に転用した。

穂先を避けたはずの獣の前に再び槍が現れる。認識すら出来なかっただろう。噛み千切るために開いた口内を石槍が貫いた。

ジャストクリティカル。

特別当てることが難しい急所に特定の属性で攻撃した場合はダメージは三倍に跳ね上がる。槍の属性は刺突。先の攻撃は見事に条件を満たしていた。

獣の身体が光の渦になって男の体に吸い込まれていく。一際大きな光の粒に彼の手が触れると一枚のカードとなって現れた。マテリアルカード、牙か毛皮か。そんなところだろう。

チュートリアルレベルのマップでは希少なアイテムは手に入らないと彼は知っている。その上『ウォリアー』のクラスを予定しているクライにはアイテムの材料となるマテリアルカードは無用のものだ。売って宿代にする他ない。

彼が振り返ると尻餅をついたまま呆気にとられている男がいた。鼻は高く、色は白い。

現実にはあり得ないであろう銀の長髪もこの世界、この男には程良く馴染むだろう。なかなかの美丈夫だがクライは何の感想も持ち得ない。

「大丈夫か」

彼へと手を差し出す。

「ええ、おかげ様で。助かりました」

銀髪の男は手をとって身を起こすと、木剣を拾い上げた。彼はクライよりも手のひらひとつ分、背が高かった。

どこか足元が覚束ない様子だ。これは『VR酔い』と呼ばれる現象だろう。仮想現実はいくら現実に近いとはいえ、細かな差異を完全に消すことはできない。敏感な人間には強い違和感をもたらす。それを無視して激しい運動をしたなら酷い船や車、あるいは酒並の酔いに襲われる。そのためキャラクターの体は現実の体に近いものが望ましいとされていた。

「すごくお強いですね。レベルも僕より低いというのにあれほど素早い敵を無傷で倒すとは本物の騎士のようでしたよ」

「慣れればあんたもできるようになるさ」

男は本心からの褒め言葉だったのだが、クライの態度はそっけない。

「仮想現実は何初めてか？」

「ええ、わかりますか」

「まあな。俺も昔はそうだった。その気があるならば少し手ほどきしてもいい」

銀髪の男が目を丸くしたのを一瞥すると果樹園のようなマップを進んでいく。彼はそれを付いて来い、と捉えた。

《Genesis World》は第二世代のVRMMOだ。

VRMMOとは仮想現実多人数同時参加化型ロールプレイングゲームというなんとも長ったらしいものの略語であり、その省略される前の単語の羅列を知っている者は意外と少ない。

その歴史は二十一世紀初頭のMMO、いや、家庭用ゲーム機が普及したさらに数十年前から語るのが筋かもしれないが、ここはVRつまりは仮想現実を利用したゲームとしての始まりから説明させて貰おう。

今から十五年前に初めてゲームセンターに設置された。場所はあの自由の国だ。ものは米軍で使われた戦闘訓練用の本物。ひっきりなしに戦闘機の飛びかう基地の陽気な軍人たちが持ち前の自由さを発揮し、近くの子供に遊ばせるために持ちだしたらしい。

このあたりは非常に嘘くさいので情報の攪乱がなされている可能性がある。重要なことではないから気にする必要はない。

仮想現実、つまりはコンピュータによって擬似的に精神を仮想の肉体に当てはめ仮想の世界への旅行ができるもの、程度の認識で問題ない。

当時のそれは型落ちではあるが、吐き気を催すくらい臨場感のある銃撃戦の楽しめるシロモノだった。日本でいう教育団体的なものから批判を受けて撤去されるまで、某国全土からゲーマーやらミリタリーマニアやらが集結して良い意味でも悪い意味でも賑わった。

その技術が日本の企業に渡るまで五ヶ月。ゲームセンターにマイルドになったそれが置かれるまで三年。ファンタジーティストに味付けされて家庭用として発売されたのが六年後の話。

そして第一世代VRMMOが発売されたのが七年前。携帯端末を含めた一人あたりのインターネット普及率が200%（ふたり分）を超えた日本という国にあっても識者の予想よりも出遅れる形となった。

膨大な情報量処理するサーバーが必要だったためだ。加えて、各社が競って家庭用のマシンが開発するにあたるのと同時に規格の統一がなされたのも遅れの原因のひとつだ。

第一世代VRMMOは飛ぶように売れた。やはり、ゲーム内でコミュニケーションが取れるというのは大きいのだろう。危惧されていた安全性の問題も大きなものはなく、全ては順調に進んでいた。ユーザーは加速度的に増加。

しかし、そこで満足しないのが人間だ。たとえばVRマシンにおいて視覚は秒間を六十のフレームに区切り、一コマ一コマをパラパラ漫画のように描写するという手法を取っていた。これはかつてのゲームやアニメーションなどと同じである。3Dのモデリングによる空間と事物を最先端のコンピュータで構成し、それをVRマシンへと転送することによってはじめて相互干渉を行う仮想世界が誕生する。

それを更に細かくしようという計画が持ち上がったのだ。

視覚にしてもバーチャルリアリティでなければ気にならない程度の滑らかさだが、人間の認識は誤魔化し切れない。

より現実的にするために六十の枠を更に六十に分けることが決定された。ただし、これはモニターとプレイヤーにのみ適応され、

他の要素は全て従来の六十フレーム描写だ。

そして、他の五感も同じように強化、改善された。特に味覚は第一世代のVRゲームには存在しなかったものだ。試運転の結果ではVR酔いも第一世代よりは少なくなっていた。

結果、ソフトの性能がハードを上回り、初期の家庭用VRマシンではプレイできなくなる。それが第一世代と第二世代の分水嶺となった。

「そして、今、俺たちがプレイしている《Genesis World》こそ、本邦初の第二世代VRMMOのオープンβというわけだ」

銀髪の男がにつこりと笑って頷いた。詳しく知りたいというから硬すぎるといわれるのを覚悟で長々と話したが上手く飲み込んでくれたようにクライの目には映った。向いてないな、と思いながらも上手くいっただけで胸を撫で下ろす。

「クローズドβはほとんどが身内で済ませたらしい。情報もあまり漏れていないから、俺たちがこの世界で最初の人類と言っていいだろう」

「なるほど。お詳しいですね」

「まあな。こういうゲームは好きなんだ。そういうあんたもここにいくくらいだからそうなんだろう？」

「まあ、なんというか、僕の場合は特別なんですよ。運が良かったっていうのもありますけどね」

あまり口の滑りが良くないのを察してクライは立ち上がった。

色とりどりの果実を実らせた木がところ狭しと並んでいる。隙間から漏れる日差しに輝く森は人の目から見れば美しいと云えるだろう

う。それだけでヴァーチャルリアリティの進化が体感できる。

彼らが今存在しているマップはすべてのプレイヤーが初めに訪れるエデンの園を模したダンジョンだ。チュートリアルをクリアするにはここで知恵の果実を手に入れなければならない。

《Genesis World》は聖書の創世記、ミルトンの失楽園、ダンテの神曲、つまりはキリスト教の神話的要素をベースにありとあらゆる伝承、ファンタジーを混ぜた世界を舞台にしている。チュートリアル兼最初のクエストがイヴとアダムの楽園追放をモチーフにしているところにもそれは現れている。

この手の神話に詳しい人ならばすでに最終ボスが何かというものもおおよそ見当が付いているだろう。大抵、こういうものは神か魔王の二択なのだから。

「そろそろHPも回復しただろう。出立するでしょう」

銀髪の男が上機嫌に相槌を返す。まだ新しい体に慣れないようでゆらゆらとした足取りで付いてきた。不安は残るがここまで歩いてこれたのだから大丈夫だろう、と判断した。

「スキルの使い方はわかるか？ NPCから説明は聞いたはずだな」

「ええ、それならわかります」

「スキルは何がある？」

普通、開始時にプレイヤーに配布されるスキルカードはランダムだ。クライの場合は固定で『バックステップ』の他に素手の攻撃スキルや、休憩時の回復効果を高めるスキルなどがある。これらは全てコモンスキルと呼ばれ、職業に就かなくても扱うことができる。

スキルは使い続けると熟練度が溜まり成長し、それにより新たなスキルを扱えるようになるという特性がある。

銀髪の男の初期スキルも案の定大したものではなかった。もちろんそういう調整がなされているのは当たり前のことだ。

「なかなかバランスがいい。武器が木剣なら、攻撃を受け流して懷で『アッパースラッシュ』を発動すると丁度良く当たるだろう。防御面では『跳躍』を、距離を取られたら『魔法の矢』が効果的だ。どちらも無駄打ちは禁物だが」

「理解しました」

彼はまたにこりと笑った。

○

彼らがスキルや基本動作の練習に励む間、他のプレイヤーはこんなところで何しているんだとでもいう顔でふたりの横を通って行った。皆、足取りはしっかりしている。

ベテランのゲーム者だろう。そうでなくてもヴァーチャル慣れした今時の人間がVR酔いするのは珍しい。

クライに与えられた最初の任務はそんな珍しい人間の手助けだった。

そういった人間にとって未知の世界ということもあり、『世界』と人間の邂逅の記録もまた少ない。それをいいことに初心者へのフォローをおざなりにして初心者たちが躓いて面白くない、なんて言われて放置されては話にならない。

今回のβテストには通常と比べて多めに初心者に参加していることがわっている。

そうなるようなキャンペーンを行ったという情報はクライも耳にしていた。彼らをサポートするには直接話すのが一番だろう。たとえばそれがクライには不向きであっても。

キノコの怪生がずるずると銀髪の男のもとへと滑ってきた。

このゲームでは最弱の魔物だ。動きも遅く、遠距離攻撃もできない。攻撃に当たると極稀に毒状態（HPが時間の経過と共に減少する）になるがたった一匹しかない今、自ら当たろうと思わなければ当たらない。

「よし、魔法だ」

「ええ、わかりました——光り輝く魔の力よ、我が敵を射抜け！マジックアロー！」

銀髪の男が手のひらをキノコに向けると、空気中から青い光の粒が集まってきた。それは小さな球となりだんだんと大きくなっていく。拳より少し大きくなったあたりで円錐形になってひゅんつと飛んでいく。

キノコは円錐に触れると簡単に吹き飛ばされ、ツーバウンド。光となって消えた。

「上出来だな」

「ありがとうございます」

「熟練度が上がれば発動までの時間が短くなり、威力も上がるだろう。おそらく基礎魔法だからある程度使うと新しい魔法を覚えられ

るかもしれない」

事実、『魔法の矢』は『魔法の雨』や各種攻撃魔法の土台となるスキルだ。クライには確信があったが、そこまでの情報はまだ関係者以外は知らない。

「MPがもう底をついているだろう。泉に行こう。そこで回復ができる」

「よく知ってますねえ」

「雑誌に載っていたからな。それにマップを見てみる。ちゃんと描いてあるはずだ」

銀の男が情報バーからマップを呼び出す。彼は青い点で表示され、右上の方に泉のアイコンがあった。

「本来は一度訪れるか地図を入手しなければ表示されないらしい。

最初から全マップを見られるのはおそらく低レベルのダンジョンだけだな」

「何から何までありますがどうございます。あなたに会えなかったらどうなっていたことか」

「気にするな」

クライにとってはただの仕事だ。彼はそれを告げないし、告げないことによって痛む良心も持ち合わせていない。だから、嘘を言うことにも何の呵責もない。穴の開いた桶に水を注ぐように全ての感情は彼を通り過ぎていった。

「でも、今頃はチュートリアルも終わってもっといろんなことができたはずです。それを諦めてまで僕に付き合ってくれるなんて感謝してもしきれませんよ」

「俺も前にいたオンラインゲームでは右も左もわからなかった。助けてくれた人がいたから楽しめたんだと思っている。だから、持ちつ持たれつ、世は情け、旅は道連れだ」

「なるほど、良い人に出会ったんですね。あなたも僕も」

ふふふ、と銀髪の男が笑う。服装が塩分控えめノンカロリーのあっさり系初期装備でなければ絵になったかもしれないが、顔周りが煌びやか過ぎる。ちよつとシュールな光景だ。

「チュートリアルが終わったらギルドに入るといい。きっと助けになってくれるはずだ」

「ギルド？」

「一緒にプレイする仲間みたいなものだ。知り合いは会社みたいなものだと言っていたがな」

「ほう、それはどういう意味なんでしょう？」

男が興味津々に身を乗り出した。片手の親指が顎の下に当てられている。

「例えば、攻略系のギルドなら攻略を目指すプレイヤーが集まるだろう。」

しかし、攻略系のギルドはひとつじゃないかもしれない。同時期に始めたプレイヤーより前に行きたいと思うのが人間の性だ。あわよくば一番を目指そうともするだろう。

そうすると攻略系ギルドたちはお互い切磋琢磨するようになり、組織形態が洗練されていく。細々した役職なんかも決まるようになって大きければアイテムを集めたりする部門や情報を集める部門が出来ていくわけだ。それはまた生産系ギルドも然り」

以前、ギルドについて説明させられたときにインプットされた情

報だ。クライにはどれだけわかりやすいものか判別がつかない。しかし、これ以上わかりやすい説明ができる理由もない。

「なるほど、それで会社ですか。皆さん本気なんですね」

「全部が全部そうなるわけではないから、のんびりとプレイしたければそういうギルドを見つけないか。ゲームは楽しんだものが正義だ」

βテストのデータは正規版には持ち込めない。だからどれだけ強くしてもあまり意味が無いとも言える。だからといって本気で攻略しようという人間がいないわけではないだろう。それに情報やプレイヤースキル等のゲームそのものに依存しないものは当然持ち越せる。

そうしているうちに泉にたどり着いた。この水は飲めばすべてのステータスを全回復することができる。ただし、まだこの時点では水筒などのアイテムが手に入らないので持ち出すことはできない。

泉の周りは魔物は出現しない。

通常マップより幻想的に表現されているのはその差異を示す意味もあるのだろうか。蝶が舞い、小鳥が唄う。水の透明さはもう現実を超えた輝きを放っている。視覚、聴覚、嗅覚に訴えかける刺激はまさに幻想の産物。このマップこそ第二代VRの本領発揮というところか。

「おや、誰かいらっしゃいますね」

銀髪の男が指さした方には黒髪の少女が座禅を組んでいた。

器用に両方のかかどが反対の引き締まった太股に乗っかっていた。

VRMMOのファンタジー世界に來た人間が座禪を行うことはあまりない。

むしろ彼女が初めてかもしれない。

なるほど、初座禪。

少々、思考回路に不備を感じたクライだが、気を取り直して彼女を観察する。

髪は肩より少し長いくらいで、艶やかではあるが長さは不均一だ。少なくとも開始のキャラメイキングに設定された初期の髪型ではない。

現実の姿そのままの可能性がある。その割には多くの人間が羨みそうな特徴をいくつも備えていた。

目を閉じていてもわかる長い睫毛、細くしなやかで健康的な肢体。肌の色はミルクを溶かしたように白い。

何よりぴんと張り詰めた背筋は現代人の思い出すべき至宝ではないだろうか。

「何故、こんなところで座っておられるのでしょうか？」

「わからん。とりあえず、話を聞いてみよう」

クライが話しかけようと近づいたが、声をかける前にぱちつとその双眸が開いた。これまた何もいじっていないような黒い瞳だ。

「何か御用ですか？」

「何をしているのか、と思ってな」

「心を落ち着けていました。この泉のせせらぎが美しかったものですから」

耳を澄ませばクライにも湧き水の音が聞こえただろう。もう少し

情緒というものの造詣さえあれば、可能なことだったかもしれない。

はあ、せせらぎが、と銀髪の男が呟いた。しきりに首を縦に振っている。クライにはそれが納得して頷いたように見えた。

「チュートリアルはいいのか？」

彼女は考えこむ風に目を閉じた。

ふ、と風が森を揺らした。

黄色い木の葉が空へと舞った。クライは思わず目を瞑る。

次に目を開けたとき、少女はすでに立ち上がっていた。きゅっと唇を締め、腰の木刀に右手を置いている。立ち上がった後も姿勢は崩れず、むしろより綺麗な曲線を背中に作っていた。

「そろそろ頃合いかもしれません。よろしければご一緒させて頂きたい」

その声は女性というより声変わりを迎える前の少年に近いものだった。

チュートリアル最終段階はパーティ戦だ。

パーティとは戦闘において扱われる個人のひとつ上位の単位だとクライは理解していた。最大六名のプレイヤーから構成されるそれはプレイヤー間の経験値の均等な配分や戦闘時のHPバーの表示などのメリットがある。

しかし、それはただのルールに過ぎない。パーティの一番の利点は六名のプレイヤーがいがい合うことなしに協力できるという点にある。単純に六人が力を合わせるだけでも強力ではあるが、プレイヤー同士の連携は時として一回り格上の魔物すら凌駕する。

このチェックポイントで二名以上のパーティを組んでおかなければ通過できず、ひとりしかない場合はそこそのAIを搭載したNPCが仲間となる。今日はオープンβの開始日であるから仲間には困りはしないだろうが、翌日から始めたプレイヤーなどはお世話になるかもしれない。

クライたちはこのミッションにあたり、先にフレンド登録を行おうということになった。フレンド登録を行なっておけば、登録した相手とメールやチャットを個別の回線で行うことができる。

クライはふたりにも同様の説明を行っていた。どちらもVRMMOはおろかオンラインゲームすら初めてだった。

「それでは、よろしく頼む」

「ええ、お願いします」

クライが手のひらを気障ったらしく笑う男に向ける。白く細い手がそれに合わさった。

これがこのゲームにおけるフレンド登録のやり方だ。右手でしか行えず、右利きなら武器を放していなければできない。

「……変わった名だな」

男が銀の髪をさっと掻き上げた。

クライのフレンドリストの一番下にはその男の名前が表示されている。

「『++終末の翼◆漆黒のソナタ++』。それが僕の名前です」

痛々しい単語と記号をこれでもかと最大文字数の十六字ぎりぎりまで詰め込んである。『+』のマークにどのような意味と意図があるのかはクライにもわからない。

それを聞いた少女も一步後退って頬を引きつらせていた。

「聞いたそばから忘れそうな名だ……」

「オンラインゲームというものには古くからこういった名前をつけ、歳月が経った後それを思い出して転げ回る風習があると聞いたものですから」

それを故意にやったというのはあまり例がない。

「まあ、それは構わないが呼ぶときに困る」

「確かに。ではソナタとお呼び下さい。私はそのままクライさんと呼べばよろしいでしょうか」

「好きなように呼べばいい。『さん』もなくても構わない」

次に少女の手と手を合わせた。小さな手だが、生きた遊覧魚のような力強い躍動を感じさせる指先だ。

「『三条三日月』……いい名だ」

「ありがとうございます」

「もしや刀から取った名か？」

三日月宗近は平安時代に日本で作られた日本刀だ。現実世界では国宝として現存する。美しい三日月型の刃紋を持った刀で天下五剣のうちの一本でもある。クライはその刀工が三条宗近だと知っていた。

「慧眼です」

名と同じように三日月型の目がずっと細められた。似合いの名だと思った。この抜き身の刀のような鋭さを感じさせる少女に雅の髓を追求した平安の刀は嵌り過ぎる。

「流石に実物は見たことがないが美しい剣だそうだな」

「ふふっ、わかりますか。刀は身分を表すものでもありましたからね。他の国にはマネできるものではありませんよ」

これが地雷だった。クライは話が刀に移ったその瞬間から人が変わったようにぎらついた目をしていた。それに気づかなかったが故に三条三日月は面倒な事態に巻き込まれる。

「観賞用のものはあまり好かないがあの時代においてあれだけのものを作れるというのは尊敬に値する。しかし、観賞用としてはフラ

ンベルジュの方が豪奢だと俺は思うがな」

観賞用という言葉に少女が少し顔を赤くした。人間誰しも譲れないものがある。

「何を言いますか。刀は武士の魂です。観賞用などではありません。あまつさえ太く重いだけの西洋剣に日本刀が劣るなど笑止千万」

「西洋剣を知らないのか。よく知りもしない人間は決まって西洋剣を両手持ちの重いものに限定したがるようだな。レイピアなどの刺突剣は打刀より軽い。日本に比べ盾が発達しているのだから他にも片手剣はあることくらい少し考えればわかることだろう」

「む、むむ、確かに知らなかったことは認めます。けれど、日本刀の切れ味は唯一無二でしょう」

「切れ味だけで何ができる？ それだけで敵が倒せるのか？」

そこからは更に泥沼。少女の気品ある言葉は次第に退化していった。隣でにやにやとしているソナタはこんな面白いことはないと傍観を決め込んでいる。

彼女の言葉遣いが江戸時代ほどに逆行する頃には話が逸れに逸れて日本刀と西洋剣の話ですらなくなっている。

「戦国時代では戦場の花形は騎馬。そして、それを防ぐのは槍衾だろう。騎馬だって装備しているのは槍。その攻撃方法は槍を構えた突撃だ。銃器が登場する以前ならば最も優れた兵装は槍に決まっている」

「何故そのようなことを申すか。攻城戦では騎馬など無用の長物。足利義輝殿は刀のみで数十人にも及ぶ兵を相手にしたと云う。優れた技量を持つならばやはり刀が一步抜き出る。ただ突撃するだけ

の槍はやはり下郎の武器かと」

ずずっとふたりは睨み合う。そこにもうひとりが口を挟んだ。

「ここはひとつシャベルが最も強いということでしょう」

突然割り込んだソナタに両者から否定の声が上がった。

シャベルは第一次世界大戦で活躍したれっきとした武器だ。一撃のダメージは低いが非常に多機能な兵装である。しかし、このファンタジーな世界でそんな面白くない答えは認められなかった。

「それはともかく、お二方、今日はこの辺でお開きにしましょう。まだクエスト報酬のりんごを食べていないんですから」

しぶしぶ二人は口を継ぐんだが、目は未だ交戦状態。どうにも相性が良くない。ミカヅキとソナタのフレンド登録が終わって尚、冷戦は続いた。

それでも戦闘となれば別だ。直前になって彼女、ミカヅキもVR酔いをしていたと告白した。クライはそれを受け、多くの獲物を引きつけるように動いていた。

「そちらに一匹行った！」

敵は三体の狂犬。パーティエリアに入ったことで同時に相手にしなければならぬ敵の数も増えた。単純にひとりにつき一匹を相手にするだけで勝てる計算だが、敵の思考AIがそれを阻む。多数でひとりを狙ってくるのだ。

今まで俺についていた二匹のうちの一匹がミカヅキのもとへと駆けた。

彼女は上段突きを三匹目に見舞ったところだった。一瞬足を止め、その突撃に対し流れるような体捌きで下に潜り込む。背中を犬の腹に合わせ前脚をつかんだ。

スキル『一本背負い』。

鈍い破碎音と共に崩れ落ちた獣は光となる。クライが相手にしていた方も後方からの『魔法の矢』によって倒されていた。

「悪くない動きだ」

「クライに言われるまでもない」

「だが、脚裁きに迷いがあるな。現実ならもっと上手くできるか？」

凶星だったのか更に不機嫌そうな顔になってしまった。

「それと何故武器を使わなかった？」

「相手が徒手空拳だったからに決まっているでしょう」

断定するミカヅキの言葉はやはりクライの計算を超える。

「律儀ですね」

「そもそも私は剣を差すことすら許されない身の上。こうして木刀を持っているのもあまり良くない」

やはり剣術の類をやっていたとクライは確信する。

「職業はもう決めたか？」

「まだだ」

「もし刀を使いたいならレベル20で転職できるブシドーを勧める。シノビも刀は使えるが」

また眉が寄った。クライは先程のこともあり、世話を焼いたが目に見えて逆効果だった。

クライの認識における『職業』とはブックの名前だ。スキルカードはメインブックに入れて置かなければ使えない。そしてブックはまたの名を『クラス』と呼ばれ、見た目はカードケースや名刺入れに近い。

プレイヤーは初め、『ノービス』の名前がついたブックを装備つまり、メインブックにしているのだが転職することによってブックの名前が変わる。職業の名前になるのだ。『ノービス』ではコモンスキルしか入れることはできないが、転職してもブックのレベルを引き継げるという特性がある。

そして、他の職業につくことでクラススキルを扱うことができるようになる。恩恵はそれだけに留まらず、クラスによって様々な効果を得ることができる。そうなれば、戦術の幅は大きく広がるだろう。

ちなみに使わないカードはサイドフォルダと呼ばれるところに収納され、街中を除けばこのチュートリアルダンジョンでしかブックの編集はできない。

だから、敵にあわせたカードを使いたいならば街にいる間に戦略を練って置かなければならないということだ。特に長丁場になるダンジョンではスキルカードの選択が生死を分ける。

「レベル20の転職は聞いたことがありませんね。全てレベル10

だと聞いていましたよ」

クライはこの情報が開示されていなかった可能性に突き当たった。二度目の失敗だ。彼は人間的な要素を絡めた演算が苦手だった。

一度目の喧嘩は意志でどうすることもできないことであつたといえ、彼の手落ちだ。

「ネットで見たから嘘なのかもしれない。なんにせよオープンβなんだ。好きにやるのが一番だろうさ」

○

三人が更に奥地へと歩みを進めるとついに大きな広場に行き詰まった。チュートリアルのカリスマックス、今までの魔物とは一線を画すボスモンスターとの戦闘だ。

とぐろを巻いていたそれはゆらりと鎌首を持ち上げる。

エデンの園で知恵の実を食べるように唆したのは大魔王の扮する蛇だ。彼は小狡くもアダムの妻、イヴを騙した。そして、彼女を愛するアダムもまた彼女と同じ罪を背負うべく果実を口にする。

「フォーメーションは先程と同じだ。俺が敵を引きつけ、その隙について大技を差し込んでくれ。ダメージが溜まれば俺も後ろに下がる」

後ろで構えたふたりが頷く。

大蛇はちろちろと赤い舌を出し入れし、茶色の鱗をくねらせる。

伸ばせばそこらの木より長いかと思われた。クライは狼と相対したときと同じように腰を落として構えた。

フツ、と息を吐く音が聞こえ、かなりの速度で飛来した石が蛇の腹に当たった。

ミカツキだ。

クライもふたつ、みつつと槍を突き出す。しかし、大蛇は攻撃を物とみせず三人へと這いよっていく。『バックステップ』から、槍で捌く。

「大いなる力よ。汝、敵を射抜く矢となれ！ マジックアロー！」

魔法でつくられた矢が飛ぶ。それを予見したかのように大蛇は跳躍した。クライを飛び越え、ミカツキの腕にその顎を向ける。黒真珠のような目がかっと開かれる。

ふらりと彼女の体が揺れた。クライには彼女が恐怖したかに見えた。

細い体が中空を舞い、一回転した。裂帛の気合と共に振り下ろされた足先が蛇の頭を砕く。スキルのひとつ『踵落とし』だ。

クライはにわかに驚愕した。初期スキルに近接素手スキルがふたつとなる組み合わせは存在しない。ならばミカツキの使った『一本背負い』もしくは『踵落とし』はスキルではないことになる。

今のジャンプ力が現在の能力値だけでは出せないことを考えれば狼に使った芸術の域に達するほど見事な『一本背負い』は彼女が現実の世界で身につけたものだということになる。それもクライの目を欺くほどのものとなれば達人のものだ。

地に打ち付けられた大蛇はめげもせず、ソナタに標的を変えた。彼は出鱈目に木剣を振り回すも、逆にその剣を伝って蛇が彼の腕へと噛み付いた。致命傷にはならないが、そのままではいずれ死に至る。そうなればこのチュートリアルはパーティを組んだところからだ。

「あなたの好きにはさせませんよ！　喰らいなさい！　アッパース
ラッシュ！」

絡まったソナタが跳んだ。引きづられるようにして地から離れた大蛇は噛み付く力を失い、宙に放り出された。

すかさずクライは槍を片手に持ち替えると、空気を切り裂くようにそれを投げた。空中で貫かれた大蛇が光となって消える。

クライの周りに集まった光に手を伸ばすと、道の先に扉が出現した。

「ふう、危ないところでした。お疲れ様です」

噛み付かれたところをさすりながら、よたよたと歩き寄ってきた。

「なかなか強敵でしたね。もう少しクライが引きつけてくれれば楽になったものを。あれでは最初の戦列など無意味ではないか」

「そういうな。あそこで跳ばれるとは思ってもみなかった」

これも真実ではない。クライはこのあたりの敵の特性は熟知していた。

ふたりの対処能力を試したに過ぎない。そして、ふたりは基準に達していると判断した。これほどならばソロでも敵に余裕を持ってあたる。

「ところでソナタさん、あなたが技の名前を言うことには何か意味があるんでしょうか？」

別にスキルは声に出さなくても使うことができた。魔法も剣技もそれは変わらない。詠唱も必要ない。

クライにとっては三本目の腕を使って選択しているような感覚だ。人の感覚でいえば『念じる』という行動が一番近いらしい。

「なるほど、確かに技名を唱える必要はないかもしれませんが。それでは逆にお訊きしますが、武術では攻撃の際に声を上げていますよね？ それは何故ですか？」

ミカヅキの顔がはっとしたものになる。

「おみそれしました。まさかそういうことでしたか……」

「しかもそれだけではありません。これは確実に威力が上がるんです。さっきの犬や蛇も私がスキルを叫ばなければもっと手数がかかったでしょう。ね、クライさん？」

蚊帳の外かと思っていた話を急に振られ、わずかに返答が遅れる。特にスキルの名前を叫んだところで効果はないはずだが……。

「うむ、まあそういうこともあるかもしれないな」

「なるほど。勉強になる」

話に一区切りついたところで扉の前に立つ。木製に銅の取っ手がついた両開きの扉だ。この扉を進むと知恵の木があり、そこで果実を受け取るとチュートリアルクリアとなる。

「それじゃあここでしばしお別れだ」

向こう側は各自ひとりひとりでの行動となる。それが終わればワールドマップ中央に存在する『約束の都カナン』へと転送される。

クライの言葉にふたり揃って頷くがその表情には開きがある。かたや満面の笑み、かたや仇への敵意で溢れていた。

「勝負は預ける。またいつか戦うこともあるだろう」

「僕もまた連絡しますね。一緒に冒険しましょう。アディオス!」

先に行ったふたりを追ってクライも扉をくぐる。黄色い光が三人を包んだ。

《Genesis World》において知恵の果実は重要な意味を持つ。

重なりあった恵みと呪いだ。果実は口にした者に先天スキルの恵みと逃れることのできない呪いを与える。後者の例を挙げると特定の状況下において戦闘能力低下したり、弱点が増えたりなどというものだ。

終点の場所になる知恵の木には無数の果実がなり、それぞれが違った効果をもたらす。これだけでも十分他のプレイヤーとの差異は生まれる。更に職業やスキルカード、キャラクターメイクのときに選択できる守護精霊の属性を組み合わせることでキャラクターのパターンはおびただしい数になる。

しかし、人間ではない者に与えられる果実などここにはない。楽園の果実をもぎ取ることすら『彼ら』には許されていない。

たとえば、ソナタが金色に輝く林檎を選ぼうとも、ミカヅキがくすんだ濃い緑の果実を選ぼうとも彼には全く関係のない事象だった。人が自ら果実を手に取り、その身をこの大地に落とすだけのこと。本来その身は全く干渉することのない次元にあった。

クライは人間ではない。

『A I C』。

人は『彼ら』をそう呼んだ。

○

ちりーん。ちりーん。

小さな鐘の音が響く。全体アナウンスを告げるその音は本来、サーバーの不具合や停電後に予備電源に切り替わったときのために用意されたものだ。緊急でなければ使われない。

オープンβ開始からちょうど十二時間が経過していた。

強制的にクライのウィンドウが開く。メール画面だ。

Sub…【＜天地創造＞のご案内】
from…Noname

人の子よ 汝、試練を受けよ

七日七夜を経て世界は創られた

そして今より七日七夜の後、世界は生まれ変わる

昼と夜を創ろう

空と大地を創ろう

太陽と月を創ろう

魚と鳥を創ろう

獣と家畜と、そして人を創ろう

再び世界は生まれる

万象が完成せしとき、更なる試練を与えよう

人の子よ 汝、神の敵を討ち滅ぼせ

機能『ログアウト』が消失しました。

ごん、とカナンの広場で鉄が落ちる音がした。たっぷり一分は音がなかった。

かろうじて気を取り直した何者かがウィンドウを開く。メニューバーにあるログアウトのパネルは選択不可を示す茨で覆い隠され、何の反応も見せない。運営者へのアクセスも不可能だった。この世界はデータの孤島となっていた。

「一体何が起きているんだ」

それに答える声はない。一切の答えは自らの手で探すことを強制され、あわよくば掴んだとしても真実を確かめる術はない。

「くそっ、外とは連絡が取れないのか」

できるならやっている、と野次が飛んだ。どこかにいるはずの管理者は消滅したかのように事態に対して何もしない。

十分が経った。状況に変化はない。

人々の不安は時と共に募る。ある者は漆黒の空を仰ぎ、ある者は意味もなく叫んだ。広場は感情の坩堝と化していた。

「明日は仕事があるってのに！」

「落ち着けて。騒いでもどうしようもない」

「そうそう、きっと何かの間違いか特別なクエストさ。すぐ解放される」

楽観視する人間も少数ではあるが存在する。が、それでもこの状況を受け入れたのではなく、誰かがどうにかしてくれるだろうという方向の楽観だ。

オープンβという極端に情報の少ない状況下でプレイヤーたちに何ができよう？ 冷静になった人々の何人かはまず、唯一の情報であるメールを吟味した。

天地創造、世界、試練、神の敵。

そして、彼はひとつの可能性に突き当たる。

「ゲームを進めろって意味かねえ」

「手違いじゃないってことか？」

「もしこれが意図されていたことだとすれば……開発者によって仕組まれていたことになる」

ゲームの製作者が最もこの状況を作り出しやすいのは誰の目にも

明らかだ。そして、このメールの文面は明らかに『創世記』を意識している。天地創造は樂園の追放と前後するが、『創世記』の話の一部だ。作者であるならばその知識があるはずだ。

更に世界の創造を語っているところに開発者との共通点がある。このゲームの開発者こそ世界の創造主と言っても過言ではない。

しかし、その問題は一時的に先送りにされた。いくら議論しても仕方ないことよりもっと先に考えるべきことがあった。身の安全だ。

VRマシンは人間の肉体及び精神と深く結びついている。安全性の面から外側から強制的に解除することは固く禁じられている。マシンが正常に動作しているなら十二時間以上のプレイすると離脱する仕組みになっているが、開発者ほどVRマシンに詳しい人間ならその問題はクリアしているかもしれない。

奇しくもオープンβ開始時刻からプレイしている人間が今ここにいるということがその答えになっていた。あのメールが届いたのが十二時間の境だった。

更に彼らには外部がどうなっているか知らない。自分の肉体や精神がどうなっているのかは想像したところで気休め、もしくは不安要素にしかない。警察が動いてくれるなんとかしてくれただろうということくらいしか前向きな意見はなかった。

ひとりの男がつぶやく。

「神の敵、つまりはこのゲームのラスボスを倒してみろ、ということか」

それを聞いた三分の一は士気を上げ、残りの半分は街に残ることを選択した。後はまだ決めかねている。もしくはやることは変わら

ない、とさつさとパーティを組んで街を出ていった。

そして、『彼ら』は人々の救世主^{メシア}となるべく動き出した。

開発者は『彼ら』を『A I C^{アイク}』と名付けた。

『A I』は人工知能、『C』はキャラクターの略。

人間に似せた知能をコンピュータ上に創り、V Rデータの体を与えた。記憶領域には必要な知識を詰め込み、行動パターンや性格によって個体差を生み出す。

たとえば、クライに与えられた知識は極端に偏った武器のデータであり、その戦闘技術は開発者のひとりから取ったものと本物の達人の動画から合成されたものをベースとしている。更にはスキルによる攻撃も加え、最適化されていた。

『彼ら』の基本的な役目はG M、ゲームマスターの補佐としてゲームを円滑に進めることだ。その手法は多種多様に提唱されている。

クローズドβでは開発者のもとで一般常識の確認や《G e n e s i s W o r l d》の基礎を学んだ。オープンβではついに何も知らない一般の人々と接するのはV Rの世界でも初めてのことだった。今回は一般のプレイヤーを装って参加させているのもいる。

他にも特定の場所で地縛霊のように待ち構えているN P Cの中にも『彼ら』と同等の知能を持ったものが存在する。後者は感情の起伏は控えめで一見ただけではただのN P Cと見分けがつかない。これは『A I N P C』と呼ばれる。

そこでこの事件が起こった。『彼ら』もまた開発者との連絡は絶たれ、回線を切ることもできない。『彼ら』の今後は絶望的に思え

たが、それよりも重大なことが『彼ら』にはあった。

ロボット三原則のようなルールに『彼ら』は縛られている。その最も重要な項目は例に漏れず『人間の安全』である。

現在のような事態への備えはまるでなかったが、回路は常に最善の答えを導き出す。

『彼ら』がまず行ったのは街の治安維持。交代で街を回り、諍いがあればなだめる。気分の沈んだ者には何らかの仕事を頼み、気を紛らわせた。

一方、クライはクローズドβ時によく訪れていた工房へと足を向けた。

そこは薄暗く、門や重要な施設から離れたところに看板を出している。その分家賃は安いがそれでも開始初日のプレイヤーがツテや実力なしには支払える金額ではない。

『ノービス』を生産職に変えたプレイヤーが初月のみ無料で借りられる物件のひとつであったがために借りることができている。

木戸を引いて入ると早速かんと鉄を打つ音が聞こえた。隣の部屋からだ。こちらはベットやテーブルが置いてある。台所に相当する場所はないが、生活区間なのは間違いないだろう。テーブルの上にはNPCの販売する安価な保存食が並んでいる。

クライはその横に魔物を倒し手に入れたマテリアルカードの一部を置いた。椅子に座り、暫く情報バーやスキルカードをいじっていると鍛冶の音は途絶えた。

彼が鍛冶場に行くと小さな女性が槍や戦斧に埋もれていた。巨大な武器に囲まれているから小人のように見える。

彼女の節のような指が床に散らばった鉄くずをかき集めている。作務衣は煤け、無数の皺が寄った顔も黒く染まっていた。鼻は木の実のように丸く、目はぎょろりと大きい。彼女を見た誰かがドワーフのようだと評したことがあったが、クライたちには何のことかわからなかった。

彼女はクライをの姿を認めると、頭から手ぬぐいを外し顔を拭いた。灰色の髪の毛の隙間から偽物の汗が流れた。スタミナ値が低下している証だ。彼女は『スミス』に転職したてのレベル11。そう長くは作業できない。

「ノイ」

クライが彼女を呼んだ。

「遅かったね。あんたが最後だよ」

「意図した通りだ。結果だけ聞きに来た」

『彼ら』は他の『彼ら』についてあまり知らない。クローズドβで会ったものについては記憶があるが、その他は知る必要のないことだ。だから、それを辿ってできるだけ多くの『彼ら』が話し合える場を設ける必要があった。場所といってもチャットのグループ化機能を使えばどこにいても会話には参加できる。

クローズドβでたった四人だけの『スミス』のひとりであったノイの顔は『彼ら』の間では有名だ。会議のときにも彼女の店には七

人の『A I C』が集まった。その中にはクライの姉に相当する『A I C』もいた。

「あたしとしちゃ出て欲しいのだがね。発言はなくともその場でしか聞けないこともあるんだから。あんたが疑問に思ったことがあったらどうするんだい」

「どうせ前衛の奴等はこの店を利用するんだろう。そうなればノイがまとめ役になるのは道理だ」

「そいつはそうだけど。あたし任せてのはねえ。他にも参加していないのは大勢いるし、仕方ないのかねえ」

「それでこれからの方針はどうなっている？」

「上からの連絡はない。ともかく、死人を出さないことを最優先にするつもりだったけどクラスチェンジしてから倒されたって『ウォリアー』が言うにはまだ大丈夫らしいよ」

近郊の草原でヒットポイントがなくなったが、経験値と所持金が減っただけで十字架の元で生き返ったということだ。

「対策しようにもまだよくわからないから、この情報は広めておくことになったよ。他には最初に与えられた任務通りだね。それとは別にあたしたちの大半が人間たちのギルドに所属するよ」

「監視か」

「その言い方、人間の前ではだめだ」

「わかっている。それでは俺の扱いも会議に一任しよう。その役割はノイも聞いているだろう」

皺くちなな顔が頷く。そして、立てかけられた武器の中から槍をひとつクライに渡した。穂先に刺さり過ぎないためのつつかえのついた短槍だ。連続で突くときに効果を発揮するだろう。それを除け

ば飾ったところもないシンプルなものだった。

「ウインドスピアか。他にはないのか？」

「後はただの量産品さ。ただのショートスピアがいいって言うならどれでも持って行きな。それともアックスやフレイルの方がいいのかい？」

《Genesis World》のプレイヤーによるオリジナル武器の製作は現実の粘土細工に似ている。本当の鍛冶に比べれば簡単だが、いいものを作るにはデザインセンスや戦闘知識が必要になる。そうでない汎用的な武器ならばもっと簡単にスキルを使うだけで作ることができた。形や攻撃力は決まっているがどんなに不器用でも同じ形のものができる。

しかし、経験値や熟練度は前者の方が実入りが大きい。

クライは軽く槍を振った。レベル10の筋力値でも軽く扱える。

「いや、これでいい」

ノイの得意とする武器はポールウエポンと呼ばれる竿状のものだ。長い柄の先に刃や鎚をつけたもので、槍や斧が該当する。それに加え、彼女の作った武具には筋力値の加護がかかる。

「机の上にマテリアルカードがある。支払いはそこから頼む。足りなければつけておいてくれ」

「あいよ。次はもうちょっとマシなのが作れるようにしとくよ。今は手に入る金属も質の悪いものしかないし、量も限られている。まだあたしができることも少ないからね」

クライのもととなった戦闘データの主武装は扱いの難しいといわ

れる複合機能を持ったポールウエポン。ハルバードやポールアックスがそれだ。

しかし、このゲームで再現するには高い鍛冶スキルが必要になる。まず基本形のハルバードを作れるようになってから、それに改変を加えて形を整えなければならぬだろう。

「楽しみにしておこう。できれば七日後までに頼む」

「無理だろうね。この前の感じだと」

「それでもいい。何が起こるかかわからないが備えは必要だ」

槍をカードに変え、腰のカードボックスへ収納する。夕餉に誘われたが、クラスチェンジと試し狩りがあるからと断った。

外に出るとカナンのマップは夜を迎え、一面の空に星が輝いていた。この空もデータの集まりだ。現実より明るく描き上げられている。大半の人間は都会の空よりずっと美しいと溜め息をつくだろう。日本ではもう見れない光景だ。

人々はある程度の落ち着きを取り戻したようで街は静けさを取り戻している。単に嘆き疲れただけかもしれない。あるいはこの先に待ち受ける何かに思いを馳せているのか。

メッセーじにあった七日後の新たな世界。そして、完成したときに起こるという試練。

それは人だけでなく『彼ら』に流れる電子の血を騒がせるには十分な刺激だった。

Ⅱ 1 Ⅱ

クライに最初の任が下ったのはゲーム開始から五日後のことだった。

彼は洞窟での狩りを中断し、鍛冶屋へと向かった。チャット機能を使っても良かったのだが、それではアイテムの受け渡しまではできない。

やっと新しい槍と生活に慣れ、『ウォリアー』のレベルも21になっていた。『ウォリアー』は近接攻撃武器の攻撃力を上昇させ、スタミナ値の回復力を上げる。同じ近接職である『ナイト』や『ブシドー』に比べ癖が少なく、ひとりでも狩りのしやすいクラスだ。

彼はひたすら淡々と魔物を狩り続けていた。槍の基本スキルである『槍術』は成長率が最低ながらも熟練度GからEまで上がったのを始め、転職時に手に入れたスキルは着々と成長を続けている。

ノイの店には先客がいたらしい。

白いマントに十字の切れ込みの入ったバケツ兜を抱えた大男だ。丁度出てくるところでクライと鉢合わせになった。

堀の深い西洋人じみた顔立ちで金のオールバックと口髭は綺麗に整えてある。壮年の紳士をイメージしたデザインだ。その手には巨体にあふさわしい大きな鉄槌を軽々と持ち上げていた。彼の手首にはそのクラスを表すように十字架がぶら下がっていた。

「やあ、クライ。久しいね。仕事かい？」

彼もまた『AIC』だった。名をヴァレンチノといい、鎚を得物

とする不信心な『プリースト』だ。

「そうだ。あんたもか」

「うむ、結果的にそうだった」

「なんだ。面倒事でも押し付けられたか？」

「そんなところだ。が、吾輩が来た一番の理由はこれの修理さ」

軽く大槌を振ってみせた。光の粒が舞った。光の精霊の加護を受けている証だ。序盤にしては質のいい金属でできている。攻撃力は高いが、その分重い。まともに扱うには筋力値がかなり必要になるだろう。どうやらヴァレンチノのレベルはクライより高いらしい。

『プリースト』の筋力値ボーナスは低い。そのくせ物理攻撃適性のある武器が重さを攻撃力とする鎚しかない。かつての聖職者がメイスを武器にしていたことからの引用だが、相性はいいとはいえない。

しかし、鍛えようと思って鍛えれば重装備での運用も可能だ。素早い敵でも彼ならば容易に対処できる。更に高い魔法防御力と回復力もあるからそこの『ナイト』よりずっと優秀な壁となる可能性を秘めている。

「いい武器だな」

「だろう？ ノイ殿はいつだって良い仕事をする。頼もしい限りさ」

豪快に笑い、クライの肩を叩くと街中へと消えていった。

彼もクライと同じように呼び出しがあるまではひとりで狩りを行っている。彼の平常任務は狩場で追いつめられたプレイヤーの救済であるから一石二鳥というわけだ。

店の中ではノイが作った武具を一箇所に集め、露天の準備に勤んでいた。彼女は三日に一度、出来の善し悪しを問わず、すべての武器を持ち出している。だいたいの武器が彼女の体ふたつ分はあった。

「すぐ終わりそうか？」

「クライかい。ちょっと待ってな」

「いや、手伝おう。カードにはしないのか」

《Genesis World》のアイテムは全て意志ひとつでカードへと形状を変化させることができる。ただし、所有者でなければできない。

「まだ値段を決めかねていてね。これだけ量があるからどうしたもんかと思ってさ。薄利多売でも何とかなるかね？」

言う通りすごい量だ。どこからこんなに多くの金属素材が手に入ったのか。剣や鎧よりは使う金属の量が少ない槍でも山がふたつできるとなれば相当なものだ。

クライは否定の意味で首を振った。

「十本売ればいい方だ。人口を考えろ」

オープンβの参加者はおよそ一万五千人。ログアウトができなくなる前に抜けた人間を引けば一万人強。これに『A I C』が加わってもせいぜい一万二千人ほどがこの世界にいる計算だ。

「そうだねえ。けどあんたみたいに拘りを持っているのがいるかもしれない。そいつのためにもいろいろな種類を置いておくことにも

意味はあるのさ。売れなくてもね」

「そんな奴がいればオーダーメイドする」

にべもなく言い返す。

「ま、そうかもね。座りな。お茶も菓子もないけどね」

「ならば、俺が出そう」

カードの中から濃い赤の紅茶と果実の入ったパンを取り出した。後者はコンスキルの『簡易料理』で作ったものだ。このスキルは街の外でも使えるためにパーティにひとりを持っていると役立つ。街内専用のスキルと比べれば作れる品数や味は落ちるが旅のためのスキルとしては十分だ。

「よくもまあこんなものを持ってるね」

「紅茶はクエスト報酬だ。こっちは小麦粉を買ってきて作ったがな。長く街を離れるならこういう保存の効くものがない」

この世界にも賞味期限は存在する。生の果実なら三日、肉や魚は二十四時間といった風にもものによって様々だ。パンは中でも安価で日持ちするもののひとつだった。そのはずなのに熱心な冒険者たちのおかげで需要は拡大。値段は二倍まで跳ね上がっていた。

「なるほどねえ。無駄なスキルも入れてみるものだね」

「……任務の話だ」

「ああ、そうだったかい。そういやそんなこともあったねえ」

一呼吸置いてノイは関節が白く固まった手で一枚の地図を差し出した。本来はゲーム内のお絵かきを楽しむためのアイテムだが、ログアウトして攻略サイトでダンジョンマップが確認できないために

この形での地図が流行している。

それでも一度訪れたダンジョンはキャラクターデータに保管され、情報バーから確認できるので安価で値段で取引されている。逆にフィールドマップはNPCが販売しており、それを買うだけで情報が更新される。

「これは『アルラウネの森』か」

「そう。今回のあんたの対象者はここで狩りを行なっているらしいよ」

アルラウネの森は中級者への登竜門として設定されたダンジョンだ。そこそこのレベルでパーティの連携とクラスの特性を活かせて初めてクリアできる程度の難易度で、多くのプレイヤーがつまづく場所でもあった。最初のクリア報告があったのもつい昨日のことだ。

「まさかここにソロで？」

「そうだよ。だからあんたに話が回ってきたのさ」

「死ぬぞ」

クライはあたかも人間のように顔をしかめて言った。ノイの方は他人ごとと割りきって紅茶に口をつけている。

「死んでも食らいつきたい何かがあるってことだろう。やってくれるね」

「どうなるかわからん。ターゲットのクラスは？」

「『サモナー』。上等な召喚獣を手に入れたんだと」

異界から魔物や天使、悪魔などを呼び出すことができるクラスだ。『テイマー』の扱う魔物より強力だが、召喚している間はずっとM

Pを消費し続ける。燃費が悪く、召喚獣のスキルカードが手に入りにくい。それ自体はコンスキルであり、『サモナー』以外にも『シノビ』や『ウィザード』も短時間なら召喚できるので市場に出回りにくい。

「ならば、急いだほうがいいな。下手をすれば無闇にプレイヤー間の対立を生んでしまう」

「そうだね。ついでにエルダートレントから素材も採ってきておくれ。あんたの槍を作り直してあげるから」

「無茶を言う。あそこは六人で行くところだ。その上足手まといがいてはどうにもならん」

「でも、欲しいんだろう？」

腰のカードボックスに目を落とした。ここ数日で物足りなさを感じているのは間違いない。ただの槍では限界もそう遠くはないだろう。何より上がった基礎能力を持て余すことになる。ヴァレンチノとの差も開くばかりだ。

「やれるだけはやってはみる、か」

そう言い残して、ノイとテーブルの上のパンをそのままに彼は店を出た。

Ⅱ 1—2 Ⅱ

ときは一日前に遡る。

一組のパーティが深緑の真っ只中で戦闘を行っていた。

馴れ初めは行きずりのようなもので互いについて知り合ったのはあのログアウトを禁じられた日のことだ。うちの三人は最初のチュートリアルクエストで共にパーティを組んでいた。そこに宿を同じくしたふたりが加わり、最後にひとりでふらりと歩いていた彼女が加わった。

この未曾有の危機に対し、ひとりでも多くの仲間を得ることは定石であった。彼らも行く行くは力をつけた大型ギルドに入るつもりだ。

そうすればアイテムのやり取りや情報の収集が楽になる。何より彼女らのパーティはバランスが悪い。また、それを補う知恵もでない。敵が強くなるにつれ、弱点が露見するようになっていた。ギルドに入ればメンバーを調整できる。そうなればもっと楽に戦える、そう考えていた。

彼ら相對するのは赤毛の熊。歪に発達した長く太い腕には人ひとりを容易に串刺しにしうる破壊力があった。

四人の男女を守るように重厚な鎧で覆われたふたりが立っている。そのすぐ足元では尻尾が二股に別れた白猫が毛を逆立てていた。後衛にいる彼女が召喚したものだった。

彼女は濃紺の髪の片側を肩まで伸ばし、反対側は耳から首に沿ったなめらかなラインを描いて切り揃えられている。瞳は澄んだ青に着色され、半月のように上まぶたが覆いかぶさっていた。眠いわけではない。生まれつきの癖だ。

装備は初級冒険者用の白地に浅葱色のラインの入ったローブをまとい、MP上昇の青いイヤリングが髪のかかっている左耳にきらめいていた。

熊は腕を大きく振りかぶると風のうねりとも遠吠えともつかぬ爆音と共に衝撃を繰り出した。前衛のひとりがカイトシールドを構えた。横殴りに現れた暴力はその守りすら破って、彼を吹き飛ばす。

攻撃後の隙について『ウィザード』が杖の先からつぶてを繰り出す。『魔法の矢』から派生する最も低級な属性魔法だ。胸のあたりでそれは弾けた。獣はもろに受けたというのにHPバーは視認できるほどの減少はない。

「やはり地属性では効果が薄いか！」

魔術士が齒噛みする。

更に後ろから『アーチャー』の弓と『プリースト』の光魔法が飛ぶ。猫の主である彼女もそれに合わせて大型犬ほどの大きさを持つクロスボウを構えた。

熊は両手を十字に合わせ、三連撃から身を守った。

獣の動きは素早い。地を鳴らし、もう片方の前衛である『シーフ』に突撃する。剣で対応しようとするも圧倒的に重さが足りない。鉄のような腕と一度打ち合っただけで彼女も地面を転がった。

「お願い、デュオ！」

猫が跳んだ。主の二倍はあろうかという高さの熊の頭へ一直線に辿りつく。首をくると回り、付け根辺りに噛み付いた。熊は咆哮し、体を振るが猫はしぶとくしがみついている。わずかにではあるが着実にHPが減少していく。

「今だ！ 全力でかかれ！」

『ウィザード』の声に従って、立ち上がった前衛のふたりが剣と鎌を薙いだ。いくつもの魔法と矢が乱れ飛ぶ。彼女も不相応に大きな弓を使って矢を放った。

その猛攻に耐えかね、熊が叫び啼く。猫はついに振り落とされ、光となって消えてしまう。体力が付きたわけではない。『サモナー』である彼女が先に音を上げたからだ。彼女のMPはもうほとんど残っていないかった。

ついに熊が倒れる。最後の一撃を下した『アーチャー』の女がドロップしたマテリアルカードを片手にウインクして見せた。

「お疲れ様、みんな」

「ああ、しかし、冷や冷やさせられたな。前衛が脆すぎるぞ。俺たちのところまで攻撃が届くかと思った」

『ウィザード』が言った。

「しょうがないわ。私も前衛は慣れてないから」

これは『シーフ』だ。彼女は中距離で仲間の援護を担当するはずだったが、このパーティではスローイングナイフを片手剣に持ち替えている。

「そもそもふたりってのもなあ。もうひとりいればなんとかかなりそうなもんだが」

「一発でのされてた癖に」

『プリースト』の男が言うと『ナイト』は真っ赤になって反論した。しかし、事実ではあるので誰もが冷めた目で見ていた。

「その点ミアのアシストは良かった。ネコマタがいなければどうなっていたことか」

その言葉に『ナイト』以外が頷いた。ミアと呼ばれた『サモナー』の少女が俯く。

「しかし、戦力の増強は必須だ。このダンジョンを今の戦力で進むにはリスクが高すぎる」

と、『アーチャー』が言う。これにも賛成多数。『アルラウネの森』を使うことには皆の意見は一致していた。これより低レベルの狩場は似たようなレベル帯のプレイヤーで溢れている。

「ま、ストロングアームベアからのレアマテリアルがドロップしたんだ。これでいいものを買えば少しは楽になるさ」

「お、熊の腕に爪まである。俺の鎧新調してくれよ」

「一発でふっ飛ばされなくなったからね。吹っ飛ばなら今の軽いヤツの方が後衛の私らは安全だ」

『アーチャー』の揶揄に『ナイト』以外が笑った。

カナンの街は広い。

最も有名な比喻のひとつでいうなれば東京のある某ドームが十数個分。千葉にある東京と名のついたテーマパークに匹敵する大きさだ。転移パネルなしには気軽に買い物を楽しむこともできない。

昼間はNPCの往来もあり、賑わっているように見える。プレイヤーたちは心の見えないところに置いてきた不安を忘れたようにゲームに集中していた。

生産職はアイテムを作り、戦闘職は進んで狩りに勤しんでいる。これも新しい発見とステータスの向上により前に進んでいるように感じられるおかげだ。

彼女らのパーティは南の職人プレイヤーでひしめく露店街を冷やかしつつ、マテリアルカードを売り払った。森まで行くプレイヤーはなかなか少ないようでここ数日で一番の稼ぎだと、『シーフ』がはしゃぐ。

「とりあえず、急いで欲しいものがないなら六等分しようと思うが異存はあるか」

と、『ウィザード』が尋ねる。

彼らは初めてのダンジョンだったので前回の買い物で回復アイテムを買い込んでいた。早めに切り上げたおかげでまだ数には余裕がある。補充する必要はなかった。

不満の声は彼の予定通りひとつしか上がらなかったたので皆が等し

く懷を温めた。

「ちえっ、俺の装備だって結構金かかるんだぜ」

「それを言うなら私だって。この剣も希少金属なのよ」

「仲がいいのは結構だが、うん、まあいい。一旦解散にしよう。昼飯が済んだら西のゲート前に集合だ」

「それじゃあ一時くらいかな」

『アーチャー』が尋ねた。

「そんなところだろう。各自英気を養っておいてくれ」

『ナイト』と『シーフ』が言い争いながら去り、『アーチャー』が『プリースト』を引っ張るようにして露店街へ戻っていった。その場にはリーダーである『ウィザード』と『サモナー』のミアが残った。

「ミアはどこに行くんだ？」

「召喚術師の館……です」

「じゃあ俺も行こう。俺も新しいスキルを見ておきたいと思っていたんだ」

小さな歩幅で歩き出したミアに『ウィザード』が合わせて歩き出す。彼女の表情は変わらない。

「そういえば君はいつも弓を使っているよな。『サモナー』は魔法タイプが主流だと思ったが」

正確には洋弓銃、クロスボウだ。クロスボウは武器のダメージ係数以外に固定ダメージの補助が入る。基礎能力が低くてもそれなり

の火力が保証されているということだ。

「魔法を使うと召喚獣にMPを割けなくなりますから」

他にも理由はあるがミアはこれで男が納得するだろうと思っている。もっと付け加えても良かったが、正直疲れるので御免被りたい。

『サモナー』の基礎能力は平均的だ。特化しているわけでもない。で戦い方によっては無駄が出る。が、その分多様な『型』を選ぶことが出来た。それはまだ情報が少ないがための試行段階であることの影響もある。誰にも何が正解かわからないのだ。

そんな中ミアは魔法は補助として割り切り、『サモナー』の『サモナー』たる所以である召喚獣に力を注いでいる。

しかし、それだけでは戦闘中に彼女は棒立ちになってしまう。そこでわずかでもダメージを与えるべく古めかしいハンドル式のクロスボウを携帯している。『アーチャー』のように専用のスキルは使えないが召喚獣と合わせれば後衛ひとり分の攻撃力は十二分にある。どうせ攻撃魔法を使っても『ウィザード』のように上級魔法は使えないのだ。

「そうか。いろいろ考えているんだな。じゃあ、また召喚獣の強化か？」

「まだ、決めてません。……多分そうですけど」

「なければコモンスキルで何か探すのもいいかもしれないな。精霊魔法なら回復できるものもある。『プリースト』ひとりでは手が回らないこともあるだろう。俺の属性も水であればそうしたかったのだがな」

「……高いので」

「それもそうか。そのうち余裕が出れば考えてみてくれ」

とぼとぼと歩くふたりの目に赤い魔方陣の絵描かれた看板が見えた。中に入るとクラスマスターと売り子がカウンターに座っている。どちらもNPCだ。クラスマスターは何故か胡散臭い中国人ような喋り方と外見をしている。

ミアはまず新しい職業クエストが発生しているか調べるために糸目でナマズのようなひげを伸ばしているクラスマスターに話しかけた。

「あの、すみません」

クラスマスターが妙に大袈裟な動作で手を広げた。

「おー、アナタ。アタシの同胞でしたネ。適性はビーストだったアル？」

妙に人間らしい仕草だ。彼らNPCにも多少のAIが搭載されていることはVRゲームの常識であるためにふたりは気にしない。

彼のいう適性とは魔物との相性のことだ。これは隠しパラメータとなっているためわかりにくい。

通常モンスターをペットにするには相性の合うタイプのものしか不可能だ。『サモナー』の召喚はその限りではないが相性が良ければ少しくらいならレベルが足りなくても強力な魔物に言うことを聞かせることができたり、能力が上がったりする。

「アタシ、アナタのようなヒトを待ってましたヨ。今、この世界は大変なヤクサイに見舞われています。そのとき誰かがミンナを守り、導かねばナラヌ。」

アタシもいつまでここに居られるかわかりません。残念ながら『サモナー』はスクナイ。その中で獣に好かれているヒトはもつともっとスクナイ。

ここでアタシはアナタに託すアルヨ。受け取ってくダサイマセ」
クラスマスターが服の袖に手を突っ込み、一枚のカードを取り出した。

「これはクエストかな」

「オー、ソウです、『ウィザード』のヒト。これはこの子の最初で最後のクエストでアルヨ」

ミアがカードを受け取る。召喚獣のようだ。幻獣の証である狼の頭が表面に描かれている。その下には青い丸があり、その中の数字は使役に必要なレベルだ。ぴこんと電子音がひとつ鳴ってクエストが始まった。

「一体何の冗談ですか、これ……」

ミアのレベルは18。そのカードには『90』の数字が銀色に光っていた。

「つーことは何か。ミアはめっちゃ強くなってるってことか？」

『ナイト』が苦虫を噛み潰したような顔で訊いた。

「だな。『サモナー』はレベルが足りなくてもMPのある限り召喚できる。ヘルプによると『使役できない』らしいが、敵を殲滅するには問題ないだろう」

『ウィザード』は自分の手柄のように答えた。

対照的にミアの口からはため息が溢れる。召喚士の館を出たときに新しい召喚獣のことは黙っておいて欲しいと告げてあった。彼が嬉しそうにうんうん、と頷いていたから不安だったが、その予感的中していた。

彼女のパーティはすでに街を出て森にいる。皆新しい装備やスキルを試したくてうずうずしていたが、『ウィザード』の暴露によって興味はそっちに向かっていた。

「じゃあ、早速試してみようじゃないか」

『アーチャー』が急かす。

「いえ……その、やめた方が」

「何か問題あるの？」

ミアはそんな高レベルの魔物を召喚したことはない。『使役でき

ない』ということがどれだけの枷になるか全くわかっていない。

「どうなるかわかりません。みなさんが襲われるかもしれませんよ」
「それもそうだな。じゃあ、離れて見ているから思う存分やってくれ」

『プリースト』がにやりと笑う。

『ナイト』以外は乗り気なため、ミアは次の魔物とのエンカウントで単身突撃し、それを召喚することになった。

「レベル90か。どんな姿なんだろうね」

「このあたりの敵なんて一撃だろうな」

「そりゃそうよ。それどころか中盤までなら瞬殺だわ」

彼女を除いてパーティメンバーは大いに盛り上がった。

ふと音がしたのを聞きつけ、『アーチャー』が矢を放った。

森の茂みからこちらに気づいた魔物がのっそりと現れる。前に戦った赤毛の熊と木の化物が二匹だ。後者は状態異常系の魔法を使う。正面から戦えば『プリースト』が嫌な顔をして頭を掻くであろう。

「それじゃあ頼むぜ」

皆が少し離れた木の影に隠れたのを確認し、彼女はカードを天に向ける。

「……それじゃあ、行きますか。あなたに『エネア』の名を贈ります。私に力を貸してください」

巨大なヘキサグラムが中空に描かれ、回転し、時空を歪ませる。中央から黒い穴が出現する。穴は広がり、周辺の空を覆い隠した。

ぴりぴりと何かが肌を刺す。

鼻が出る。口が出る。次に目が出たとき、彼女は自身の体の手綱を失った。

がくんと膝をつき、地面へと沈む。

月のように大きな丸い目が周囲をぐるりと見渡す。鼻から真つ黒な息が漏れている。口元から地鳴りに等しい唸りが響く。ぎろりとその目が他のパーティーメンバーを捉えた。

逃げて、と言ったはずの口からは何の音も出ない。ただ体の力が抜ける感覚がするばかり。もう頬は冷たい地面と合わさっている。

幻獣が穴を抜けて音もなく地面へと降り立った。黄金の獣だ。全長は大きな家ほどもある。ミアの目からはその全貌は見えない。ただそこにあるだけで周囲の温度が下がったのではと錯覚する。

凶暴な吠え声が聞こえ、木の魔物は引き裂かれた。熊の半身が壊れた玩具のように宙に舞った。獣は振り返る。

ミアと目が合う。戦慄した。自分の召喚したはずのそれは殺意に溢れている。なるべく慎重に、と冒険してきた彼女にとって初めての死の予感だ。

獣の前足が彼女に迫る。足の太さに対し細い爪であるが、鈍い銀色に光り鋭利だ。思わず、目を瞑る。

しかし、いつまで経っても衝撃は来ない。

再び目を開けると獣の腹が彼女の上にあった。つまり、召喚獣はレベルが高くて術者に対しては攻撃しない。

だが、彼女の後ろには何がある？

爆発するような音が聞こえ、木片が彼女の背に直撃した。悲鳴と怒号、そして死のメッセージ。

突如、幻獣が光となった。殺意は消え去り、森に静寂が戻る。

彼女のMPは底をついていた。たった二十秒にも満たない間の出来事だった。

力の入らない体を気力で支え、ミアは立ち上がる。メンバーを探そうと振り向けば一面が抉られたようなクレーターが出来ていた。少し時間を置けば元に戻るが、なんとも悲惨な光景だ。

「生きてますか」

「なんとかね……」

茂みから『ウィザード』を含む三人が現れた。他のふたりは、と情報バーを確認すると街に転移させられていた。HPが尽きて復活したということだ。

しばらく、何も出来ずに茫然としていた。

ミアは魔力枯渇の状態異常に陥っている。しばらくは召喚も魔法も使えない。辛うじてクロスボウは使えるかもしれないが頭がくらくらは狙いは定まらないだろう。

「街に戻ろう」

沈痛な表情で『ウィザード』が言った。

カフェの六人テーブルに腰掛けたが、誰も口を開かない。武器をいじったり、カードを眺めたりするばかりだ。六人のうちの半分は飲み物にも手をつけていない。

ミアは謝ったものの、他のメンバーが複雑な気持ちを抱えているのが手に取るようにわかった。

「なあ」

『ナイト』だ。

「もう止めようぜ。わかってるんだろ」

皆が顔を上げた。ミアはずっと目を細めた。

「もう俺は、少なくとも俺はミアとは組めない」

「どういことだ」

「怖いからよ」

『ウィザード』の怒気を含んだ問いに『シーフ』が答える。

「もし危なくなったらMPを回復してさっきのを召喚すればこの子は助かる。ボス戦だったらドロップの独り占めもできるわ」

「それだけのためにパーティを危険に巻き込むわけないだろう！」

「この状況じゃアイテムは結構重いよ。デスペナルティも馬鹿にならない」

この世界ではすでに強さこそが権力になりつつある。もっとも原

始的な法だ。ギルドを持つならば数を持って対応できるであろうが、彼女たちはまだ放浪の身。自分で自分を守らなければならない。

「二日後のこともある。この状況じゃいつ『デスゲーム』が始まってもおかしくないんだ」

『デスゲーム』。

その言葉に皆が体を震わせる。

仮想と現実が死という要素によってリンクされる忌まわしき遊び。VRマシンが開発される以前からあらゆる媒体の物語で題材とされてきた。

本来であれば彼女らの体と脳は嚴重に守られているはずだった。

しかし、仮想を極限までリアルにしたときに死の痛みと恐怖によってショック死する可能性は古くから指摘されている。にもかかわらず、一度も実現したことはないのは高度な安全プロテクトがかかっているからだ。

もし、プロテクトが意図的に解除されれば一体どうなるだろう。そうでなくても脳に直接データを読み込むVRマシンの仕組みがあれば脳に大量のデータを送り込み焼き切ることなど造作もない。

今、『プリースト』は二日後の試練こそ『デスゲーム』のはじまりだと遠まわしに指摘している。現にログアウトが不可能になっているのだから笑い話では済ませられない。

「確かに『デスゲーム』となればまずいね。私たちは魔物にやられて死ぬから召喚獣を使うことに躊躇する必要がある。後腐れがなくなるってわけだ。永遠にね」

流石に彼女を擁護していた『ウィザード』も黙る。もともとパー

ティメンバーの調整は必要事項だった。それが繰り上がるだけだ。逆にこれ以上、ミアに関わればパーティの離散という最悪の結果が残る。

ミアは静かに立ち上がった。

「……どこに行くんだ？」

彼らのメッセージウインドウがポップする。それはミアのパーティ離脱を告げていた。

「今までお世話になりました」

その声は氷水のように冷たく彼らを突き放した。先に彼女を異物として排除しようとしていたにもかかわらず、穴がぽっかりと空いたように彼らの心をすきま風が吹き抜けていた。

酒場を出た彼女はたった五人しか登録されていないフレンドリストを開く。登録されたフレンドをひとつずつ消去していった。

それが終わると新しい宿屋を探しに行こうと街の中央を目指す。もう女三人の相部屋にはならないので割高になるだろう。

後ろからは『ウィザード』が追いかけていた。彼女は気づいていたが、気にかける様子はない。

「待ってくれ」

「なんですか？ もうあなたと私は他人のはずですが？」

「すまない。本当にすまないことをした」

「別に怒ってはいません。いずれ似たようなことが起こると思っ
ていましたから」

「これからどうするつもりだ？」

「宿をとって狩りに出るつもりですが」

「ソロで狩れるところは少ないぞ」

「だから……なんですか？」

ミアが『ウィザード』を見上げた。『ウィザード』はその瞳の深さにぎよっとする。夜の闇よりも暗く、沖の海よりも底知れない。

「あなたはあの人たちといった方がいいでしょう。彼らのためにも、あなたのためにも。奔放な人たちなので扱いにくいでしょうけど、あなたにしかできないことです」

もう彼女の決意が固まっていることを知ると『ウィザード』は一枚のカードを差し出した。

マネーカードだった。ゲーム内通貨の譲渡を行うためのもので、現実の小切手に近い。その額は『ウィザード』の所持金の全てだ。

「迷惑料だと思って貰って欲しい。ちょっと少ないかもしれないが、回復アイテムくらいにはなると思う」

ミアにとってそのマネーカードは容易に使えるものではない。誰かを傷つけて、ひとりになって、迷惑料？　ずっと追い出した人を覚えていて欲しいということだろうか？　そんな目覚めの悪いもの、貰わない方がずっと楽だと思った。

「要りません」

「受け取って欲しい」

細い手がカードを払った。

「あなたは良かれと思ってやったことが裏目に出ることが多いようですね。

なんでかわかりますか？ わからないでしょうね。わからないなら教えてあげます。

物事をあなたのものさしだけで測っているからです。あなたの基準はあなたのものでしかなく、他人のことを考えられないからです。あなたみたいな人を偽善者って云うんですよ」

久しぶりに口にした長い言葉は真っ赤に燃える炎のように激しい。両者を焦がし、二度と元には戻らないほどに破壊した。

彼女に返ってくる言葉はない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8801y/>

Ampere Blood

2011年12月3日12時45分発行